佳作

# おばんちゃん

山形県山形市立高楯中学校
一年　沼澤　郷

この夏の蝉しぐれで思い出します。平成二十七年八月十八日のことを。

私の家族は、四世代八人家族でした。祖々母、祖父母、父、母、姉、兄、私です。私は祖々母を「おばんちゃん」と呼んでいます。八月十八日がおばんちゃんの命日です。

平成二十一年五月十九日おばんちゃんは脳梗塞で倒れました。当時私は三歳でした。その時の記憶があやふやだったので、祖母に話を聞くと倒れたその日から家での介護が始まったそうです。「どうして老人ホームではなく家族で、自宅でお世話をすることを決めたか」と祖母に聞いてみました。「うちはお寺で、おばんちゃんは、旦那さんを四十代で亡くしたんだよ。住職だったひいじいちゃんを亡くしておばんちゃんは女手一つでお寺を守っていかなければなかったの。女の人がお寺を守るのはとても苦労があったんだよ。」と教えてもらいました。おばんちゃんが守ってきたお寺は今から二十年前に、私の父がバトンを受け取って、お寺を守っています。そのため、おばんちゃんが苦労しながらも、一人でお寺を守ってきてくれたことに感謝をこめて最期まで自宅でお世話することに、家族で決めたそうです。

おばんちゃんの状況を、今の私にあてはめてみると今私の父が四十七歳で亡くなり四十五歳の母が子ども三人とお寺を一人で守るということです。想像しただけで、大黒柱の夫がいなくなってとても心細かっただろうなと思います。そんな苦しい時も、歯をくいしばってお寺を守ってきてくれたおばんちゃん。改めてその偉大さが分かりました。そして、脳梗塞になってからもおばんちゃんの強さを感じました。寝たきりで死ぬまで時間を待つのではなく、目標を立てて人生を豊かにしていったからです。

「春」は桜を見られるように、「夏」はお盆でみんなの顔を見られるように、「秋」は総供養で一緒にお参りできるように、「冬」は元旦祈とうに顔を出せるようにと、車いすに座って起きる時間を作りました。おばんちゃんは私達家族の力を借りながら、生きる意味を作っていったのです。わずかな目の動き、口元の動きの表情を見ると、私の心もほっこりしました。でも日に日に血中酸素濃度の数値が下がっていき、死が近づいてきているのが分かりました。亡くなる一時間前のことを祖母が教えてくれました。「おばんちゃんは優しい顔で左目から大粒の涙を流したんだよ。」祖母は感謝の気持ちを受け取ったように思えました。

おばんちゃんを看取ったのは、母と兄と私でした。

最期、おばんちゃんは、まだこんなに力があったのかという位、大きくひとつ息を吸って、そこから肩を大きく震わせて「フウッー。」と息を吐きました。まるで体の中の魂が今にも天に飛んでいきそうなくらいに感じられました。

おばんちゃんは、四十代で夫を亡くして、女手一つでお寺と家庭を守り、脳梗塞になっても生きる意味を見つけて心豊かに過ごしてきました。苦労しながらも、おばんちゃんは逃げ出さずに、九十七年間生き抜きました。

おばんちゃんの人生を聞いたり、実感することで、生きていくうえで大切なことを教えてもらい、おばんちゃんが歩んでいった道が私に力をくれました。

私は、中学一年生で十二歳です。中学校生活や部活動で自分の思い通りにならなかったり、友達とのコミュニケーションがうまくいかなかったりと大変なことがあるけれども、私は友達や学校の先生方そして家族に守られています。

でも、これからさらに大人になると、社会に出て働いたり、家庭を築いたり生きていくうえでたくさん苦労をすると思います。そんな時、おばんちゃんが苦労したことから逃げ出さなかったように、一つ一つ目標を立てて私も壁を壊していき、心豊かに生きたいです。

私は、嫌なことや、不安なことそして心配なことがあると、いつまでも悩み続けたり、親に当たってしまうことがあります。学校ではがまんできるのに、親の顔を見たり、家に入ると安心してしまうのか、気が抜けてしまいます。これは自分が嫌なことや、不安なことそして心配なことから逃げようとしているのだと私は思いました。そんな時は、おばんちゃんの顔を思い出すことにします。

私がおばんちゃんからもらった宝物は、「生き抜く強さ」です。おばんちゃんのどんな苦しい時にも生き抜いてきた強い力を私の人生のお手本にしていきます。

今は、四世代八人家族から三世代七人と猫一匹家族になりました。私が生き抜いていく姿を見守っていてね。おばんちゃん。